

第1回 日本医師会

# 赤ひげ賞

第1回「赤ひげ大賞」(5人)

松田好人	北海道	名寄市風連国民健康保険診療所所長
久藤眞	三重	久藤内科理事長
横手英義	和歌山	横手クリニック院長
鈴木強	広島	鈴木クリニック院長
中野俊彦	大分	直耕団吉野診療所所長

日本医師会 赤ひげ大賞 日本医師会と産経新聞社が共同で、地域に密着して人々の健康を支えている医師の功績をたたえて、広く国民に伝えるために、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設。全国の都道府県医師会から推薦された「地域住民の健康を支えている医師」「離島や過疎地域での活動など地域の現場医療に貢献した医師」から、毎年1回、5人を選考委員会で選定し表彰する。

## 日本医師会 横倉義武会長



「赤ひげ大賞」の名前の由来は山本周五郎の有名な時代小説「赤ひげ診療譚」を基にしています。「赤ひげ先生」といえば一般の人にもよく知られていますし、貧しくて不幸な人たちに寄り添い、身を粉にして働く姿を思い起こします。そのモデルとなつたのは、江戸時代中期にこの(日本医師会館の)近くにあった「小石川養生所」という貧民救済施設の小川半船という医師です。患者を前にしたとき、医師は患者に寄り添い、同じ目線で治療に当たるといふ医療の本質は当時も今も変わっていません。高齢化が進む現在、何でも相談できる「かかりつけ医」の存在はますます重要になっています。「日本医師会 赤ひげ大賞」の創設により、地域の皆さんが安心して暮らしているよう、地域医療の現場で長年、尽力いただいている現代の赤ひげ先生にスポットを当て、その功労を顕彰します。

## 「かかりつけ医」の重要性増す

BSフジで30日放送

表彰式は22日、東京・内幸町の帝国ホテルで開催される。5人の大賞受賞者の日頃の活動と表彰式の模様「密着!かかりつけ医たちの奮闘〜第1回赤ひげ大賞受賞者〜」はBSフジで30日午後1時から放送予定。



笑顔がモットー (三尾郁恵撮影)

## 松田好人氏(北海道名寄市) 「だれかがやらないと」信念

「患者さんの『ありがとう』の言葉が支えます。それがあれば、がんばれます」。ただ一人、40代での受賞。それにあきわしい理由は現地で取材するとよく分かる。本職は公立の診療所での治療にある。普通ならそこまではずなのに、氷点下20度、大雪で道路がさがる中でも、外へ外へと自ら運転して出ていく。行き先は訪問診療があれば、特別養護老人ホーム、グループホームと多岐にわたる。夜間も休日も携帯電話をオンにして、24時間態勢でどこにでも駆けつける。深夜に血圧が急上昇した80代の女性は「先生は、はだし同然ですぐに来てくれた。長生きてきているのは先生のおかげ」。赴任して7年、行動力のある「家庭医」は患者からこのような信頼を得た。旭川から北へ列車で2時間弱の内陸地に位置する風連は、もち米生産で知られる人口450

# 心と体支える5人の志



飾らない人柄 (沢野貴信撮影)

くとう・まこと 久藤内科理事長。昭和21年、三重県生まれ。66歳。三重県立大医学部卒。同大医学部付属病院に勤務、この間、旧宮川村(現大台町)国民健康保険報徳病院、県立一志病院などに赴任。60年に久藤内科を開業。

## 久藤眞氏(三重県津市) 父の精神継ぎ 地域に根ざす

津市の中心地にある久藤内科。理事長の久藤氏はライフワークとしての「血友病患者の治療」を行うとともに、父の代から親子2代で、外来から訪問まで地元で寄り添った医療活動が続いている。「地域に根ざすことで患者も家族も信頼してくれる」。救急車より先に患者から呼ばれることがあるのも信頼の証し。「患者は家族と同等」との考えから、ふだんははだしにサングラス履き、そのほほえみを絶やさない姿からは、さくさくはらんな人柄がにじみ出ている。子供のころから父が自転車に乗って訪問診療に向かう姿を見続けていた。その影響で自然と医師の道へ。父をくした後は「その精神を少しでも受け継ぎたい」と勤務先の大病院を離れ、医業を開業した。外来に訪問診療、依頼があれば昼夜問わず往診に駆けつけ

る。患者には父の代からの、幼少時に世話になった人もおり、診察した年齢層は0〜105歳に広がった。「何も特別なことはない。笑って謙遜するが、高齢者の在宅診療には特に情熱を傾けてきた。認知症や寝たきりの高齢患者宅には、地元の古い写真や出身学校の校章を持って行ったり、女学校の校歌や軍歌を歌ったりして昔話を花を咲かせる。「話をすれば脳の刺激になるし元気になる」。高齢者世帯では時に電球の付け替えもする。そうした思いやりが患者からの信頼を得る。末期に大切な遺品を託して下さる人、最期を病院ではなく久藤医師のもと自宅で迎えたいという人も多い。「訪問すること自体で患者や家族に安心感を持ってもらえれば、今や役割は医療だけにとどまらない。(福田涼太郎)



お年寄りの味方 (松永渉平撮影)

## 横手英義氏(和歌山県九度山町) 患者情報の共有化を実現

よこて・ひでよし 横手クリニック院長。昭和27年、和歌山県生まれ。60歳。和歌山県立医科大学院修了。同大助手を経て平成2年に横手クリニック開業。伊都医師会長時代に「ゆめ病院」の立ち上げに深くかかわる。現在、和歌山県医師会理事。

聴診器や血圧計と並ぶ往診の新しい武器は、タブレット型端末「iPad」だ。患者の名前を打ち込むと、血液検査の結果や投薬状況、患者の自宅までの地図も瞬時に表示される。「初めて行く医師にも安心して」といふ思い、岡田さゆり看護師長と、往診の車の運転席に乗り込んだ。高野山の麓、和歌山県九度山町で開業して22年。内科医の妻、裕子さんと二人三脚で「横手クリニック」を支えてきた院長は、地域の病院や薬局など49機関が参加する「ゆめ病院」の医師でもある。九度山町と周辺の1市2町からなる伊都医師会の医療圏は、約9万6千人の住民の約27%が高齢者。医療の必要性は高く、中核病院の橋本市市民病院と地元の診療所の両方にかかる患者も多い。地域は医師不足で、「在宅医療もやるとなる」と、医師ひとりではとても対応できない。「そこで医師会が考えたのが、患者の医療情報を関係機関で共有できるシステム『ゆめ病院』だ。開発費用の一部は持ち出しで、医師会理事の給与が半額に、会費が倍額に跳ね上がったこともあった。個人情報保護を登録する煩雑さに反対の声もあったが、「四輪駆動のようにパワフルな横手さん(前会長)が一肌脱いで事業を進めた」(小西紀彦元会長)という。「開院」から12年、「ゆめ病院」には現在、住民の75%以上の7万3千人の患者情報が登録され、在宅医療への応用も始まった。在宅患者の急変時にかかりつけ医が対応できないときは、当番医師が「ゆめ病院」の情報を基に患者を診る。「受診は伊都医師会一人一人の赤ひげ魂が評価された。一人で仕事をするのでなく協力し合い、難題に取り組むことが重要だと思えます」(道丸摩耶)

【主催】日本医師会、産経新聞社 【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ 【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

## 力をあわせて、未来を守る



ワクチンで、この国のひとりでも多くの人々を病から守りたい。そんな熱い想いを胸に、「ジャパンワクチン」の取り組みが始まっています。ワクチンの研究開発で世界をリードするグラクソ・スミスクラインと、日本のワクチン事業で確かな実績を築いて来た第一三共。それぞれの強みを生かした新会社です。新しいワクチンの普及と、よりすぐれた混合ワクチンの開発などによって、乳幼児から高齢者まで、この国のすべての人に信頼性の高い疾病予防を提供したい。そして、予防接種の大切さや副反応についても、幅広く関係者の皆様と手をたずさえて、調査研究や啓発活動を進めたいと考えています。予防こそが、これからの医療の中核になる。ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。そう信じる私たちは、新しい時代に向け、今大きな第一歩を踏み出しています。

ジャパンワクチン株式会社  
japanvaccine.co.jp



日本医師会

第1回

# 赤ひげ大賞

厳粛に受賞者を選定委員会たち  
昨年12月20日、東京都文京  
区の日本医師会館  
(大橋純人撮影)



「赤ひげ大賞」の受賞者を  
決める選考会は昨年12月20  
日、開かれた。各都道府県医  
師会から推薦を受けた20人の  
候補者から、選考会では最終  
の5人を決める議論が展開さ

## 都道府県の医師会から推薦20人

「赤ひげ大賞」の受賞者を決める選考会は昨年12月20日、開かれた。各都道府県医師会から推薦を受けた20人の候補者から、選考会では最終の5人を決める議論が展開された。

- 選考委員  
羽毛田信吾 向井千秋  
山田邦子 羽生田たかし 今村聡 三上裕司 石川広己 外山衆司 河合雅司  
■オブザーバー  
長野明
- 昭和館館長、宮内庁参与 宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 研究室長  
タレント 日本医師会副会長 同副会長 同常任理事 同常任理事 産経新聞社専務取締役 同論説委員  
ジャパンワクチン社長

地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第1回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が22日、東京都内で開催される。大賞に選ばれたのは北海道から九州まで各地で活躍する5人の医師たちだ。山あいの無医地

区に赴任して無休で診察に当たる医師がいれば、救急医ではないのに24時間携帯電話をオンにして患者の元に駆けつける医師もいる。選考会の模様とともに、これらの受賞者の日頃の活動を紹介します。

# 地域に寄り添い 患者に光

## 鈴木強氏（広島県神石高原町） 「健康意識高める」使命感



親身な診察（志賀駒貴撮影）

「いつも真剣勝負。診察を間違えなければいいから」。神石高原町の旧神石町地区で「鈴木クリニック」を経営する鈴木強氏は、静かながらも力強い口調で、こう語った。  
この地区は、福山市の北50キロに位置する。人口約2300の山間の過疎地。クリニックは地区唯一の医療機関だ。  
「患者さんは、多いときで、高齢者中心に1日60人」。診察、レントゲン、胃カメラから縫合手術まで分刻みでこなし、時には40分の積雪の中を、訪問診療に出かけていく。小中学校の校医の仕事もこなす。  
敬務で疲れても、柔和な笑顔は絶やさない。「診療所のトップが不愉快な顔を見せれば、元も子もないから」。根底には、診察を心地よく受けてほしいという「患者本位」の考えがある。  
父親は産婦人科医だった。自らも医師の道を選び、外科医と

すずき、つよし 鈴木クリニック院長。昭和20年、旧満州生まれ。68歳。広島医科大学卒。水島協同病院（岡山県）、秋田中通病院、広島共立病院などの勤務を経て、平成8年、鈴木クリニックを開業。診療科は内科、外科、胃腸科。

## 中野俊彦氏（大分県大分市） 家庭を診療所の延長に



無休で信頼（大橋純人撮影）

「患者本人の心が燃える、喜ぶことを見つけて出すのが大事なのです」  
大分市郊外にある直耕団吉野診療所所長の中野俊彦氏は、患者に徹底して寄り添う「かかりつけ医」であり、家庭医だ。  
山あいの無医地区に赴任したのは平成元年。診療所隣に自宅を構え、「24時間、年中無休」で診療にあたった。  
「住み慣れた地で最期まで暮らしたい」との願いをかなえてあげたい。若い頃から地域医療への思いは強かった。  
診療姿勢はユニークだ。待合室には掘りこたつを用意され、お年寄りたちの話に花が咲く。趣味から家族関係まで患者のことなど何でも知っている。「患者の目線の高さを見れば健康状態が分かる」。すべて診療に繋がっているのだ。  
診療所には診察券がない。玄関が開けば、すぐカルテが準備

「高年齢者が病気になる、家族は施設入所を考えるが、やはり自宅療養が一番だ」。必要があれば即座に駆けつける。「各家庭のベッドが診療所の入院ベッドです」  
「診療所を家庭の延長に、家庭を診療所の延長に」。往診車の窓ガラスに、中野医師が求める理想の医療があった。  
(河合雅司)

羽毛田信吾委員 皆さん頑張っているのに点数をつけるのは難しかった。評価に際しては、組織より個人の実践活動を重視。今後、都会の団地などでも独居老人が増えていくことが予想されるので、各地でそういう取り組みをしている人に高めの評価をした。また、過疎地で若い医師が尽くすことも大切なので、若い先生を高く評価した。

向井千秋委員 地域医療の現場で頑張っている人を表彰するという趣旨の賞が創設され、すばらしい。いずれの先生も優秀な先生がたかった。現代の「赤ひげ」を考えながら選考に当たった。ただ、今回、女性が1人も選ばれなかったことは少し残念。私にとっても「赤ひげ」の概念を考えるよい契機になり、選考に参加させていただき感謝している。

山田邦子委員 選考のポイントにしたのは、「会っただけで治ったような気持ちにさせてくれる医師」。ハイテク化がどんなに進もうとも、医療は人と人のつながりが大切だ。私も病気をした経験があり、人生観がらりと変わった。患者は不安を抱き、どきどきしながら病院に行く。そのような不安を患者に与えず、包容力のある先生が「赤ひげ大賞」にふさわしい。

羽生田たかし委員 推薦を受けた皆さんは地域の中で活躍している方ばかりで、甲乙付けがなかった。これらの先生方を選考するにあたり、評価の基準としては、今回、受賞歴のない方にスポットを当てた。各地域で医師はさまざまな活動をしているが、「赤ひげ大賞」の精神の通り、特に個人で頑張っている方を評価した。

今村聡委員 地域の現場で本当に頑張っている先生が日本にはまだまだこんなにいることを心強く感じた。客観的に評価をすることの難しさを痛感する中で、社会的弱者への献身度を高評価とし、医療以外の取り組みについてはそれぞれの推薦状から個別に評価した。都市部で頑張っている先生をどのように審査していくかが今後の課題だと感じた。

外山衆司委員 経済合理主義の中、お金もうけや名誉・地位を基準に行動する人が多いが、医療の分野でそういうことにとらわれず純粋に取り組んでいる人がいけばすばらしいことであり、それを基準に評価した。ただ、実効が上がりなければ地域の人を救えないわけで、その点も考慮に含めた。候補の皆さんの間にそんなに大きな差はないのかもしれない。

長野明社長 選考委員の方々が各候補者の推薦文をよく読み込み、自分の感覚で真剣に選んでいることが分り、大変感銘を受けた。特別協賛させていただくにあたり、重層明監督の「赤ひげ」を再び見たが、当時の赤ひげも立派な医師だったし、今回議論になった。ITを利用して多くの地域住民の医療に貢献したり、都会の独居老人たちの医療に目を配るといった、現代の赤ひげについても認識が深められた。今回の議論を踏まえ、生かすことで次回以降、各県の医師会もより推薦しやすくなり、この賞もますます発展して行くことを願っている。

## 赤ひげ大賞

【推薦方法】各都道府県医師会会長が1人ずつ推薦  
【推薦基準】地域医療の現場で住民が安心して生活を送れるようなまちづくりに寄り添った活動を長年にわたり行っている医師▷過疎の医療現場、特に僻地や辺地、離島などで、住民を支えている医師▷障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるような活動を行っている医師▷地域における学校保健活動、公衆衛生活動を通じ地域住民の健康管理を長年にわたり行っている医師▷原則として70歳未満の現役の医師

ワクチンデビューは生後2か月で!!

ラブベビ.jp

LovesBaby.jp

愛する赤ちゃんを守るための感染症&ワクチン情報サイト

ラブベビ.jpは、みなさまの疑問にお答えします。  
「ラブベビ.jp」は、赤ちゃんがわかりやすい感染症とワクチンに関する情報が満載のパソコン&スマホサイトです。いつでも気軽にアクセスして情報を集めましょう。ワクチンのなかには、接種できる期間が限られているものもあるので、特にもうすぐママ・パパになる人は要チェック!

**主なコンテンツ**

- ワクチン接種スケジュール表
- ロタウイルスワクチン接種期間チェック
- 感染症&ワクチン情報

**スケジュール管理アプリ「ラブベビ手帳」**

ワクチンスケジュールの管理機能やワクチン接種日前アラート機能、写真・アイコン付きのひとこと日記機能、赤ちゃんの体重/身長記録・グラフ化機能など便利なアプリです。  
\*iPhone版のみ

「ラブベビ手帳」はこちらからダウンロードできます。

<http://LovesBaby.jp/>  
<http://LovesBaby.jp/smart/>

[検索](#)

ジャパンワクチン株式会社は、日本医師会「赤ひげ大賞」へ特別協賛しています。

グラクソ・スミスクライン株式会社

ジャパンワクチン株式会社

第一三共株式会社

こんな疑問はありませんか?

- 生まれたての赤ちゃんには免疫があるの?
- ワクチンで、どんな病気が防げるの?
- 赤ちゃんのときにかかりやすい感染症って?
- ワクチン接種はいつから受けられるの?
- ワクチンにはどんな種類があるの?
- ワクチン接種スケジュールを上手に管理するには?